

ある農村における 高度経済成長期の食生活

「ビシャル(捨てる)」ことと向き合った時代

The Meaning of "Bisharu" (Throwing Away) Food : Case Study
of a Rural Village during a Period of Rapid Economic Growth

古家晴美

HURUIE Harumi

- ①問題の所在
 - ②ゆっくりと動き始めた食生活
 - ③生活改善と食
 - ④肥やしから廃棄物へ
 - ⑤「ビシャル(捨てる)」ことと向き合う
- 結び

【論文要旨】

本稿では、高度経済成長期の農村における食生活の変化を追いつつ、食べものを「作る」と対極にある「ビシャル(捨てる)」という視点から、人々の意識の問題を取り上げる。統計資料からは読み取りにくい人々の微妙な心境の変化を聞き取り調査により抽出した。

この時期、所得の向上や移動販売車の登場、生活改善運動など、食生活に新たな要素が持ち込まれたものの、N集落では食材の9割がセンザイバタケ(家庭菜園)で賄われ、自給生活がいまだ維持されていると思われた。ところが、上水道敷設やバキュームカーが登場し、「貴重な肥料」だった尿尿や生活排水は「厄介な廃棄物」となり、農と食を結ぶ循環システムが大きく変わり始めていた。

「捨てる」と言う行為が実体化する一方、その方法(捨てる方)は、より複雑な意識を反映するものとなった。現在、「食べられるもの」の廃棄は、白昼堂々とまかり通っている。しかし、昭和40年代の「捨てる」は、「後ろめたさ」と共にあり、常に控えめであった。話者の一人は畑に生活排水を「捨てる」という表現を慎重に避け、「畑に返す」と表現している。また、学校給食で不人気の脱脂粉乳や、家庭で調理に手間がかかるまだ小さなゴボウ間引いたものも、常に「こっそりと」捨てられていた。

これに対し、食べものが世の中に溢れ始めたこの時期に、「食べものをつくるための〈手間〉」「食べものを捨てないための〈知恵〉」に対する記憶やイメージの退化、あるいは住宅設備の不足による手間や知恵の具体化・実現の回避が、都市へ他出した家族から広がっている。故郷から送られてきた「食べきれないもの」を保存・加工するよりも「捨てる」ことによりリセットせざるを得ない状況が発生した。高度経済成長期のN集落における食生活の特徴を1つ挙げるとしたら、「ビシャル(捨てる)」ことに真正面から向き合い、それが「後ろめたさ」と言うナイーブな感性を伴っていた点だと言えよう。

【キーワード】 高度経済成長期、農村の食生活、食品廃棄、意識の変化